

# “Nowhere to Now Here”

「どこでもない場所 (Nowhere)」を「今ここ (Now Here)」に。  
「どこにも居場所がない (Nowhere)」人に「今ここにいる (Now Here)」と実感を。

## 都市空間における移動式食品販売車の利活用に関する研究 —オレゴン州ポートランド市における“Food Pod”の事例を通して—

### 0 研究概要

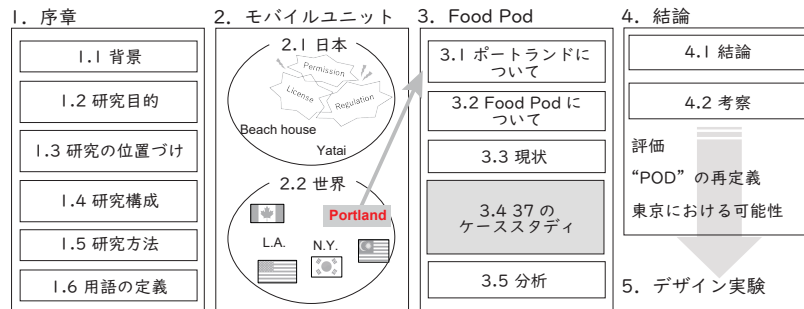
本研究では、ポートランド市に半恒久的に設置された移動式食品販売車の集積地である“Food Pod”の事例を調査・分析し、東京のような高密度な地域において、移動式食品販売車を利用した低未利用地の活用方法を検討した。

### 1 背景と目的

2020年のパンデミック以降、生活様式や移動の価値が大きく変化している。社会変化への迅速な対応が求められる一方で、建築や都市はその規模や構成を変えにくいという特徴がある。建築内部の機能が自由に街に出て活動をしている事例として、移動式食品販売に着目し、都市づくりにおける戦略的活用の方法を検討する。

米国オレゴン州ポートランド市における、半恒久的に設置された移動式食品販売車 (Mobile Food Unit, 以下 MFU) の集積地“Food Pod”を参照し、デザイン実験を行う。国内において再開発や短期的な法改正等によって発生するポイドや低未利用地に、MFU を半恒久的に複数台設置し、Food Pod の可能性を明らかにする。仮設性による組換えの容易さや、集積による視認性の高さを活かし、既存空間のアップデートや、にぎわい創出を図る提案を行う。

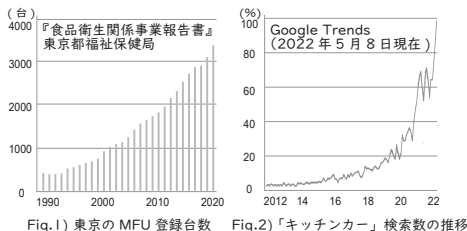
### 2 研究方法と構成



まず、既往研究よりポートランド市の Food Pod の独自性を明らかにする。次に、関連書籍や行政の公式サイトをもとに、2022年5月15日～6月15日に運営中の Food Pod の所在地を把握した。その結果、42件が把握できた。そのうち、2022年5月24日～6月24日に Google Earth の航空写真とストリートビューで運営が確認された 37 件について、立地、面積、MFU の営業の向きなど空間構成の調査・分析を行った。また、2022年9月11日～13日に現地でも実際に確認を行った。Food Pod の可能性について考察した後、デザイン実験に移行する。

### 3 現状

国内では、特に博多屋台や都心部のオフィス街でランチを提供するキッチンカーが知られている。出店場所の交渉や許可申請は必須だが、実店舗よりも参入障壁が低い。コンビニで賄いきれなくなった利用者の需要に応えている。多くの注目を集める一方で、空間利用についての制度は複雑で制限も多い。仲介業者を通すことで営業しやすい環境を作っているが、出店場所の制限が多く、ビジネスや賑わい創出の機会が失われている。



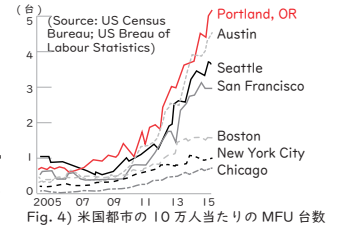
### 4 米国オレゴン州ポートランド市 Food Pod 調査

Food Pod とは、ポートランド市において、主に民地の空地に複数の MFU を半恒久的に設置して営業する屋外飲食空間の呼称である。観光スポットや地域のコミュニティ活性化のツールとして機能している。



Fig. 3) Food Pod の例

MFU に関する先行研究は米国に蓄積が多い。中でもポートランド市は先駆的とされている。ポートランド市の状況を日本と比較・分析した研究はほぼない。Food Pod は土地利用の観点からも、半恒久的に設置され地域に根差して営業しているといえる。



#### 37 事例の空間構成



#### 空間構成表

No.	Name	Address	Area (sqm)	MFU Count	MFU Type	MFU Size (sqm)	MFU Orientation	MFU Spacing	MFU Height	MFU Color	MFU Material	MFU Features	MFU Notes	MFU Status	MFU Date	MFU Photo
01	Portland															
02	Portland															
03	Portland															
04	Portland															
05	Portland															
06	Portland															
07	Portland															
08	Portland															
09	Portland															
10	Portland															
11	Portland															
12	Portland															
13	Portland															
14	Portland															
15	Portland															
16	Portland															
17	Portland															
18	Portland															
19	Portland															
20	Portland															
21	Portland															
22	Portland															
23	Portland															
24	Portland															
25	Portland															
26	Portland															
27	Portland															
28	Portland															
29	Portland															
30	Portland															
31	Portland															
32	Portland															
33	Portland															
34	Portland															
35	Portland															
36	Portland															
37	Portland															

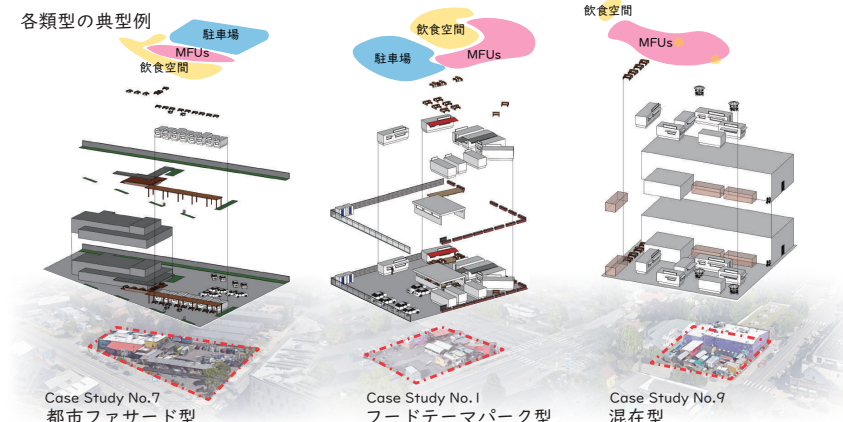
#### 類型と特徴

Plan	CITY FACADE TYPE	FOOD THEME PARK TYPE	CHAOS TYPE			
				Location	Average Area	Average Number of MFUs
Plan 1	Urban Commercial Residential District (North East)	Suburban Commercial Residential District (South East)	Suburban Commercial Residential District (North East)			
Image (From Google map)	Urban Commercial Residential District (North East)	Suburban Commercial Residential District (South East)	Suburban Commercial Residential District (North East)			
Location	Downtown (City Center)	Suburban Commercial Residential District (South East)	Suburban Commercial Residential District (North East)			
Average Area	1,800sq	2,100sq	1,200sq			
Average Number of MFUs	10.4	13.2	8.8			
Orientation	Group (L, T)	Group (L, T)	Mixed			
Additional Facility	None	Restaurant, Cafe, Bar etc.	Restaurant, Cafe, Bar etc.			
Facing Space	None	Attached	Dis-emphasis			
Features	Contributes to the city scape by lined MFUs. MFUs no seating space. Open on the sidewalk and integrated with the surrounding environment. Easy to recognize. High Visibility.	Enclosed in group of MFUs. A place for daily recreation and destination for the residents of the neighborhood. An independent third-place food court with an ingenious idea to create a space to stay. Purpose & Stay.	Unplanned formation. Independent from its surrounding. Large area on low underutilized land in the suburbs. Preparation of a food truck.			
No.	7, 10, 29, 35	14, 8, 11, 14, 16, 19, 21, 23, 24, 27, 28, 37	9, 15, 17, 18, 22, 25, 26, 36			

#### 調査結果

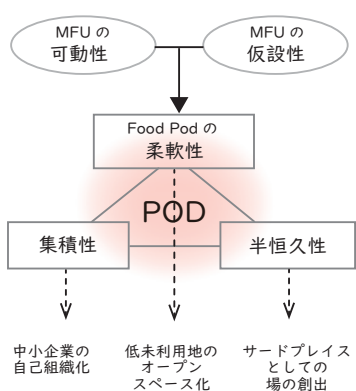
37 の Food Pod の空間構成を、移動式食品販売車の配置や営業方向について調査・分析した。Food Pod は以下3類型に大別できる。

- 「都市ファサード型」  
ダウンタウンにおいて MFU が列をなして歩道に向けて営業する
- 「フードテーマパーク型」  
主に南東地域の郊外において POD を囲うように MFU が配置され、併設の飲食空間に向けて営業する
- 「混在型」  
主に北東地域の低未利用地において、MFU の配置や営業の向きが不規則で営業する



# 5 PODの可能性

## メカニズム



### 組換えの容易さ

可動性と仮設性は、MFUの組み替えを容易にし、MFUの柔軟性を向上させる。フードデザート対策や都市空間のデッドスペースの活用に対応できる。また、都市空間のオープンソース化により、中小企業の介入を促進する。

### 視認性の向上

屋外のMFUの集積による高い視認性により、ソーシャルメディアに依存しない広報が可能となる。PODは統合的システムとして半恒久的に営業し、事業者・利用者・通行人など複数の異なるグループの人々によって構築される。天候や社会的需要などの外的要因の変化に対応できるエコシステムである。

### 空間の民主化

PODはMFUの特長を生かし、小規模事業者の自己組織化のきっかけとなる。コミュニティに集合性をもたらし、地域の社会基盤を形成する自己組織化された空間は、権力ではなく、住民の要求に対して動く。

## 食の媒介力



食事は生活の中で繰り返される習慣であり持続可能性を持つ。年齢、性別、国籍問わず、すべての人は食べ物なしでは生きていけない。都市そのものが食に導かれて変化することもある。飲食のための空間がインターネットに取って代わられることはない。

# 6 効果と評価

## 指向性

### 利益追求



商品価値；稀少

### 空間利用



利用価値；豊潤

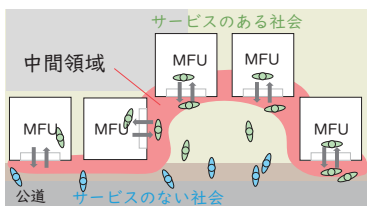
資本主義では、空間を含む商品が商品価値として認識され、希少性が重要視される。デザイン実験では空間の利用価値を重視する。POD運営の持続可能性に、経済的かつ生物学的な持続可能性を加え、PODの機能の継続を実現させる。

## 受け皿としてのPOD



細分化された社会では、近隣で何が起こっているのかを知ることは容易ではない。デザインされたポイドによって、都市空間の分断を解消する。PODで起こる活動は、日々の出来事をつながりを生み出す。

## 中間領域



PODは様々な業種や人々が交わる中間領域を作る。ルールの異なる半公半私領域が交わる面積が拡張され、どちらにも開かれた空間が活性化される。異なる領域に住む人々が同じ空間を尊重しながら使うことで、多様性と寛容性が生まれ、すべての住民の暮らしに応えることが可能になる。

## 集積性

食を媒介とした他者との潜在的な接触量



多くの人が集まる屋外飲食の場では、人々はよりオープンで社交的な振る舞いをする。屋外のPODは開放的で、誰もが利用となりうる。日本で現在主流のキッチンカーは単独での営業がほとんどだが、MFUが集積することで、街からの視認性が高まり、人々により多くの選択肢と、他者との接触の機会を提供する。

## 都市戦略への適応①

### 公共交通指向型開発

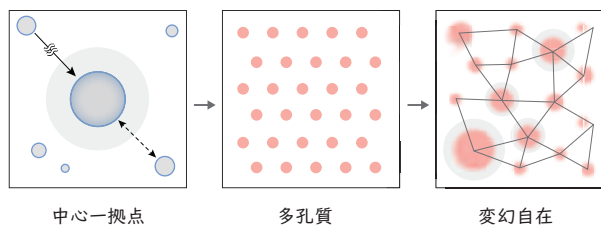


### 近隣指向型開発



駅や公共交通機関重視の開発ではなく、より近隣を配慮したPODの展開を行う。半恒久的な運営により、都市環境の活性化、にぎわいの創出、循環した雇用機会の創出が可能になる。住民主導のPOD空間は、都市生活の底上げ装置であり、土地利用と事業者の生計維持の両方に貢献する。コミュニティ全体の安全を守る目となり、サードプレイスとしての役割を果たす。

## 都市戦略への適応②

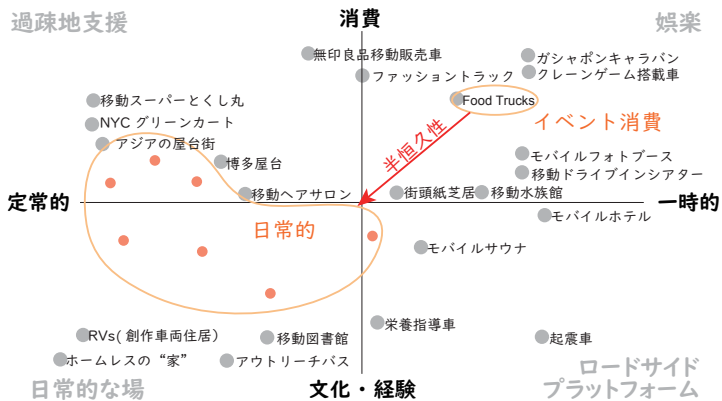


中心一拠点型の都市は、平時でも中心部以外の過疎化の進行や、中心部以外のアクセスの悪さ等の問題がある。このような都市は利用者が限られ、急激な社会変化への迅速な対応に向きでない。

多孔質な都市構造はこれらを解決し、変幻自在な都市を実現する。都市に必ず現れるポイドにPODを導入することで、住民を日常的に巻き込む新しい社会インフラを創出することができる。

## 半恒久性

世界のモバイルユニットの業態と利用頻度



イベント消費型は、マーケティング戦略に支えられ増加傾向にある。過疎地での生活必需品の配送は、高齢化が進む中で今後も増加が見込まれる。デザイン実験では、MFUの設置時間を延長することで、「移動式」の価値を見出す。資本原理から脱却し、文化的価値を強化すれば、PODの商品価値は消費の価値ではなく、空間利用の価値となる。誰もが利用でき、共存できる場所、サードプレイスとなる。

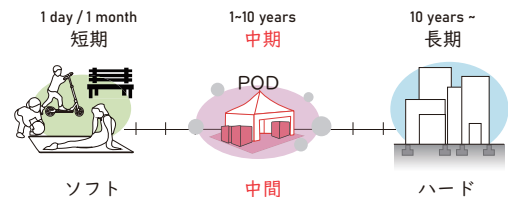
## 7 デザイン実験の概要

東京都国立市に位置するJR 国立駅周辺を対象に、仮想デザイン実験を行う。異なる環境の複数の敷地を潜在敷地として選定し、段階的に POD を展開させる。国立市は、一橋大学の設立に伴い発展した文教地区であり、学生が多く多様性に富む。線路の高架化に続き駅周辺の整備が進められており、潜在敷地として利用できる空地が多いことから適応的に選定した。

### 時間軸の概念



### POD 設置期間と機能



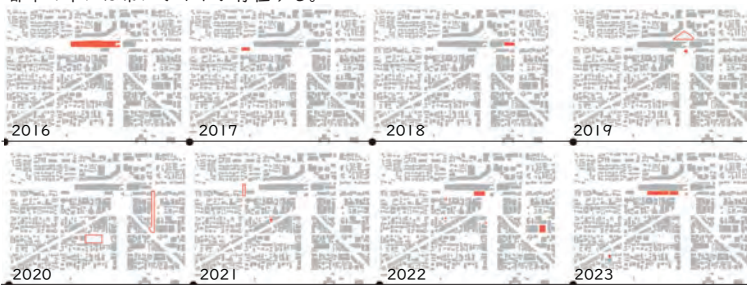
POD は中長期的なプロジェクトであり、短期的なプレイスメイキングと建築物との間に位置する。基礎を持たず仮設的であるが、付帯施設を持つなどソフトとハードの中間の機能を備えている。

### デザイン実験における POD の再定義

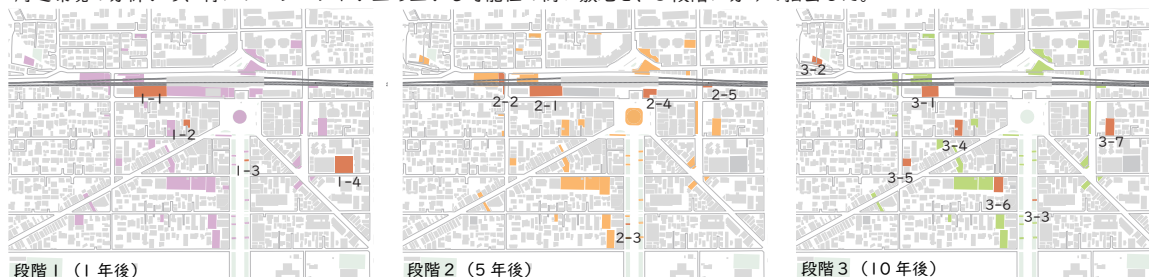
- ① 屋外で MFU が複数台集積していること。
- ② 都市の公共空間や民地の低未利用地で運営し、できる限り半恒久的であること。
- ③ 販売活動が継続的に行われていること。
- ④ 入場制限がないこと。
- ⑤ 飲食設備を備えコミュニティスペースとなる可能性を有すること。
- ⑥ イベントや伝統的な行事ではないこと。

## 8 JR 国立駅前の変遷と潜在敷地

国立市のマスタープランに基づき、新たに建設された建物や整備された空間を示す。都市の中には常にボイドが存在する。

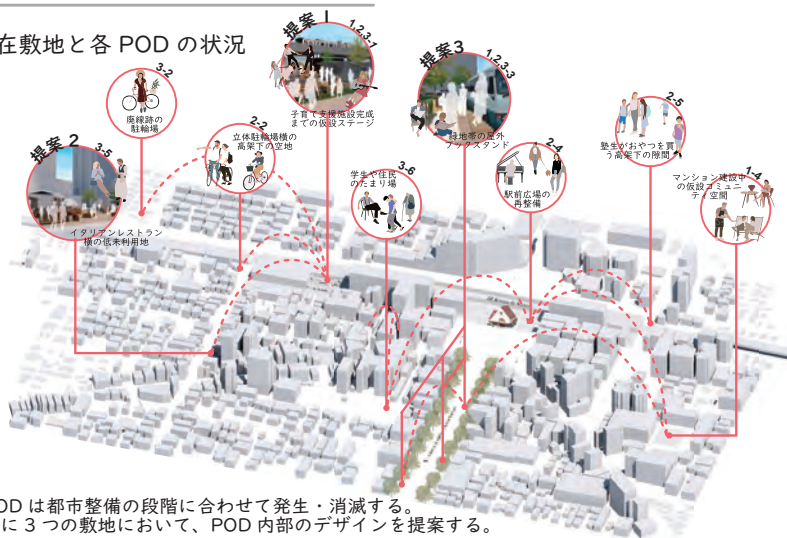


建設によって生じるボイドや既存の低未利用地を潜在敷地とする。潜在敷地は段階的に変化する。周辺環境の分析から、特にプロジェクトが立ち上がる可能性の高い敷地を、3段階に分けて抽出した。



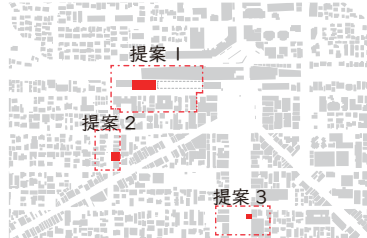
## 9 提案

### 潜在敷地と各 POD の状況



POD は都市整備の段階に合わせて発生・消滅する。特に3つの敷地において、POD 内部のデザインを提案する。

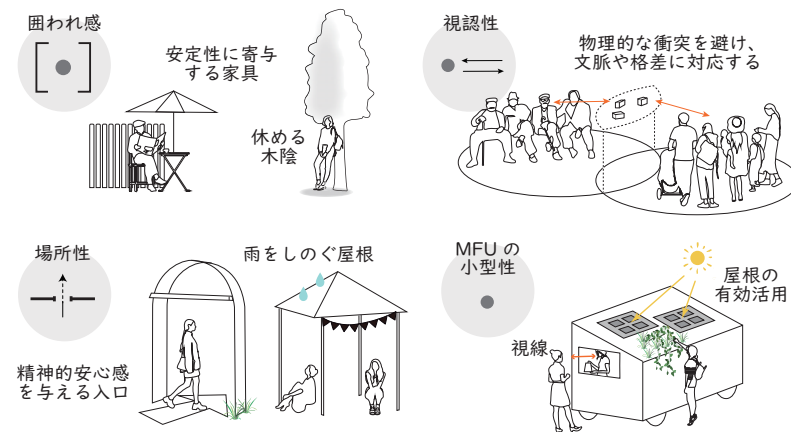
### 3箇所の提案



POD の対象は主に住民である。各提案の目標を以下に示す。

- 提案 1) 国立駅を利用する住民に半恒久的に屋外飲食空間を提供する
- 提案 2) 住宅街のサードプレイスとして子どもたちに居場所を中期的に提供する
- 提案 3) 大学通り沿いの緑地帯を大学生や住民が日常的に利用できる場としてアップデートする

### デザイン戦略



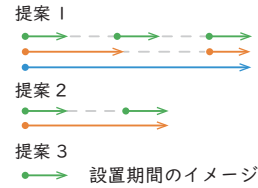
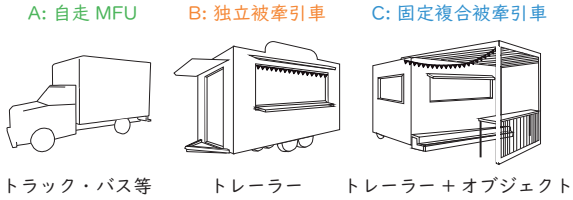
これらの要素を POD 内部の提案に取り込み、展開の幅を広げる。

# 10 POD 内部の提案

POD は 3 種類の MFU とパレットによって構成される。

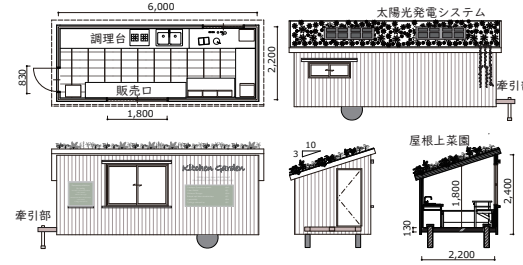
## MFU の種類と 3 提案の設置期間

MFU は、自走可能な MFU と、被牽引車で自走ができない MFU に分けられる。オブジェクトを付帯した被牽引車の MFU は設置性が高まる。3 提案はそれぞれ異なる設置期間で運営され、設置される MFU の種類も異なる。



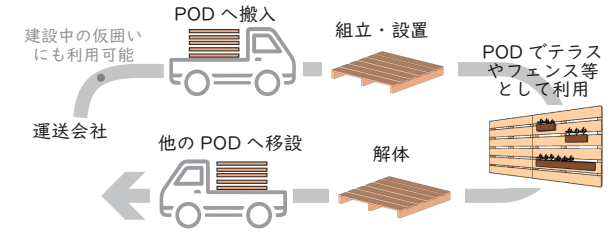
## MFU のデザイン例

MFU Bタイプ例 1:80



## 木製パレット

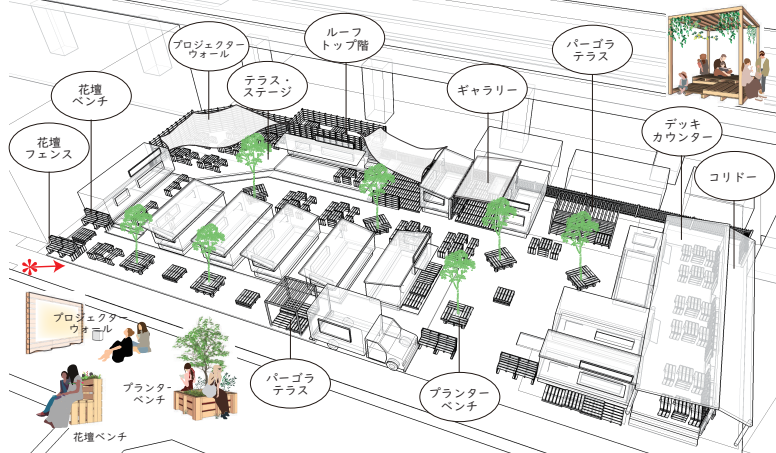
MFU とパレットを組み合わせることで、POD の設置性を高める。パレットは再利用でき、POD から POD への循環利用が可能である。



### 提案 1 建設過程で生まれたボイドの活用

▶ マンション建設予定地横に新設予定の駐車場を MFU 停留地として半恒久利用する。

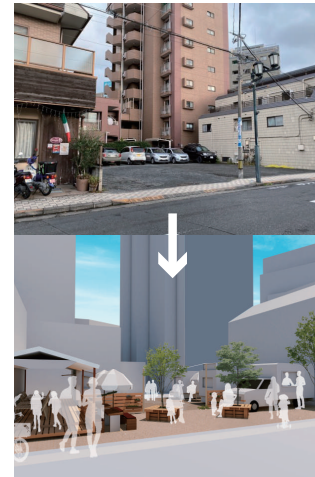
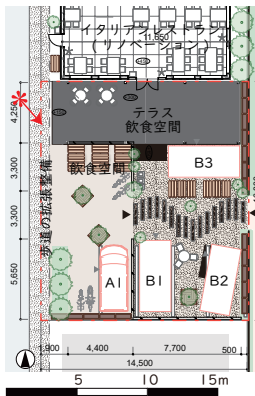
将来建設予定の常設の駐車場の屋根を活用し、仮設の MFU やパレットと組み合わせて半恒久的に POD をして利用する。道路に面する MFU は都市のファサードの一部を作る。状況に応じて、敷地の一部を駐車場と MFU 停留地に転換し、利用することができる。



### 提案 2 低未利用地の活用による目的地的創出

▶ 飲食店横の未利用地に、付帯のテラスと MFU を暫定的に設置する。

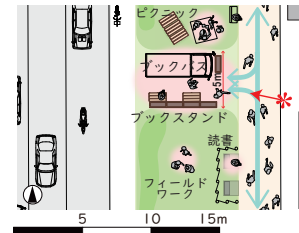
前面道路の整備予定に合わせ歩道と飲食店を拡張し、現在の駐車場に POD を設ける。



### 提案 3 公共空間におけるにぎわい創出のための戦略ツール

▶ 緑地帯の公共空間に、商用利用以外の MFU を短期的に設置する。

大学通り沿いの緑地帯は、景観保護条例により、販売活動が認められていない。学生が多く公共図書館が周辺にないことから、ブックスタンドを設置することで、同じ空間でも一時的に動的な使い方ができる。余地のある空間を日常利用する方法をルールの中で多層化できる POD は、プログラムに縛られず、幅広い規模に対応できることが明らかになった。



### 対象地域の全体模型



## 11 最後に

本提案のようなデザインされた POD を東京全域で適用することで、名もなき土地を、コミュニティ指向の場に変えることができるだろう。本実験では、国内における移動式食品販売車の活用方法を再考し、東京の都市環境における POD 導入の可能性を検討した。デザイン性の高い POD は、利用者の多様性や選択肢の増加に貢献できるだろう。

国内の都市への POD の導入には、MFU や空間利用のための許認可制度に加え、地権者との権利関係に関する課題もある。また、本研究では詳しく触れなかったが、電源や給排水などのインフラ整備の問題も残る。引き続き研究を進め、POD の実現可能性の向上に期待したい。